すてきな大分を見つけ、伝えよう！　　2026.11.5

10 月講話会『ノーベル賞に匹敵する業績を残した田原淳（たはらすなお）』ご報告



皆さんこんにちは。早いものでもう 11 月に入りました。お変わりございませんか。先月の講話会は、大分大学名誉教授の**島田達生先生**をお迎え致しまして、**大分県出身の田原淳博士**のお話を伺いました。

田原淳の名前を知る方は、現在県内でも非常に少ないのですが、**国東市安岐町の出身**で、心臓の拍動の仕組みを研究し、**それまで心臓が神経で動くとみられていた「神経原説」を覆し、刺激伝導系という筋肉で動くことを突き止めた大発見者です。**1906 年（明治 39 年）のことです。この発見は、論文（ドイツ語）で発表し、田原淳の名前は一躍世界の心臓研究者に知れ渡りました。

またこの研究の成果は、その後の**心臓病の診断法（心電図）や心臓ペースメーカーの開発へ活かされ、計り知れない心臓病に苦しむ人々の救済に繋がりました。**更には、それ以降の医学、看護、作業療法士、理学療法士、臨床検査士等の教科書には必ず**田原淳の刺激伝導系の模式図と名前が掲載されるほどの心臓学の基礎なる重要な発見**であったのです。島田先生は、**「解剖学の世界で、日本人の名前が出ているのは、唯一田原淳なのです」**と語られました。

講師の島田先生は、**自らも心臓学の研究に長年携わり、田原淳の研究業績を逐一追って行き、田原の研究業績が如何に優れた内容であるかを確かめられ、間違いなくノーベル賞に匹敵する業績であることを確認されたのです。**今回は、その要旨をご報告させていただきます。

田原淳の生涯

1　幼少年期



田原淳 1873-1952



田原淳　生家（中嶋家）

田原淳は、国東市安岐町瀬戸田の**中嶋家の父定雄と母サイの長男として生まれました。**小さいころより聡明であり、16 歳で上京して東京英語学校と独逸語学校に学び、**19 歳の第一高等学校の頃に中津の伯父・田原春搶**（しゅんとう）**の養子となりました。伯父の春搶**は、立石領木下家に仕える医師でしたが、中津に移り開業して、中津で献体解剖が行われた時の執刀助手を務めるほどの高い医学知識や医療技術を持つ医師でした。しかし、その春搶には、跡継ぎがいませんでした。**春搶の妻・貞（さだ）が、淳の母サイの姉であった**ことが縁で、田原家より中嶋家へ是非養子にとの話がもたらされたのでした。

淳の父定雄は、淳が中嶋家の長男で跡取りであったので最初は、難色を示しますが、春搶の熱意と医師としての人柄や淳の将来を考えて、春搶の申し入れを承諾したのでした。

2　東京帝国大学医科へ進学し、ドイツ留学へ

淳は、**24 歳の時東京帝大の医科大学に進み、解剖学の小金井良精教授はじめベルツとスクリバという二人のドイツ人教師から教育を受けます。**次第に淳は、ドイツ医学の奥深さに強い関心を持つようになりました。その後同大学を卒業後、大学に残り内科学教室と皮膚科学教室で**臨床医学を修め、中津で養父春搶の医業を継ぐために中津に戻りました。**しかし、医学を学べば学ぶほど「もっと学ぶべきことがある」「ドイツで勉強したい」という思いが強くなり、淳は思い切って養父春搶に気持ちを打ち明けたので

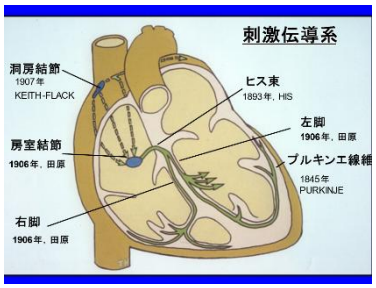
した。「それはならん。だめだ。」と**当初反対した春搶でしたが、淳の志を確かめ、ようやくドイツ留学を認めた**のでした。私費留学となりましたが、この費用を春搶は、田畑を売って用立てたといわれます。

3 マールブルク大学･アショフ教授のもとで研究



アショフ教授（前列左）
田原淳（前列中央）

29 歳の時、ドイツへ留学し、ここで**マールブルク大学のアショフ教授との出会い**がありました。大学での研究生活は、研究に研究を重ねる研究に没頭した日々でした。この研究振りをみたアショフは淳を信頼し、**世界的な発見につながるテーマを淳に与えた**のでした。それは**「心臓の心房と心室の間の筋肉束（ヒス束）は、心房の刺激を心室に与えるものか」**というものでした。淳はこのアショフからのテーマに没頭して取り組みます。しかし、前人未踏の分野であり、解明の糸口がなかなか見い出せなかったようです。苦闘している時のこと、脳裏に天の恵みのような、ひらめきがあったといわれます。それは、**“プルキンエ線維”**でした。



房室連結束（ヒス束）が延びていく先とプルキンエ線維との間に何か関係があるのでは？と思い立ったといわれます。プルキンエ線維は、ヒトやイヌ、ネコの心臓標本では確かめにくいため、**ヒツジの心臓**を標本に選択し、**顕微鏡で一つ一つ確認しては、スケッチする**という作業を繰り返していきました。**このヒツジの心臓の何百にものぼる標本調査の積み重ねにより**、淳は**「プルキンエ線維こそ、心筋の筋肉線維の 1 本 1 本に刺激を送るための装置に違いない」という着想は正しかったことを確認した**のでした。この報告にアショフは驚き、大いに祝福したのでした。



田原淳の論文　左（ドイツ語）右（翻訳）

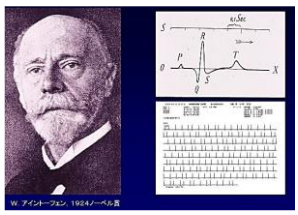
この内容は、**論文「哺乳動物心臓の刺激伝導系」（原書独語 200 頁）**として**田原淳博士の名前で出版**されました。この**「刺激伝導系」**という語は、**淳の造語で、この論文ではじめて学術の世界に登場した**ものです。**講師の島田先生は、この田原の論文原書を翻訳された**（須磨幸蔵氏、島田宗洋氏、島田達生氏）**お一人です。**

4 帰国後の田原淳



33 歳で帰国し、中津で医業を継ぐ予定でしたが、**九州大学の前身である京都帝国大学福岡医科大学助教授の招請**を受け、淳は養父春搶に相談します。春搶は名誉なことと賛同。その後 **35 歳で医学博士学位取得。**同年 7 月**教授に就任。41 歳で帝国学士院恩賜賞を受賞**（翌年野口英世が受賞）。51 歳来日した**アショフ教授と再会。**57 歳で**九州帝国大学医学部長に就任。**58 歳**九州大学温泉治療研究所初代所長に就任。**60 歳九州帝国大学名誉教授に就任 61 歳大分県出身の学生寮「二豊学寮」を設立。78 歳で逝去。**『誠意通天』**の言葉を愛す。

写真：左**《田原通り》九州大学医学部構内に今も残されている**　　（文責　青井勝久）



左写真:ウィレム･アイントホーフェン（蘭）
1924年『心電図のメカニズムの発見』で
ノーベル生理学･医学賞受賞
「私の受賞は、タハラ･スナオの研究成果に負うところが大きい」



島田先生を囲んで